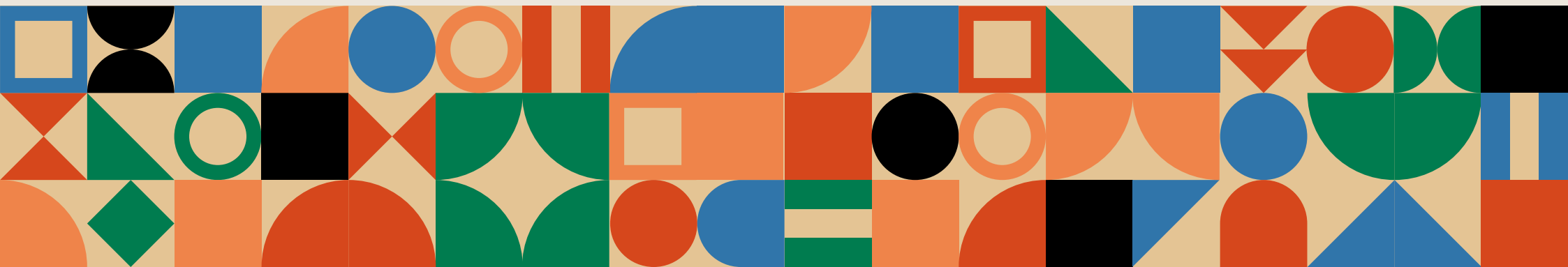


運営委員による今後の

**「私のアクション！
未来のNAGANO 創造県民会議」
のあり方検討レポート**



目次

1. 各運営委員へのインタビュー
2. 県民会議のあり方に関する試案
3. 今後の活動に向けて

本レポートについて

本レポートは2024年12月に立ち上がった「私のアクション!未来のNAGANO 創造県民会議(以下、県民会議)」が、2026年度以降にどのような役割を目指し活動していくかを、各運営委員へのインタビュー等を通じ言語化したもの。

県民会議は県民一人ひとりの主体的な活動を後押しし、2050年においても長野県が活力ある地域となることを目指す取組。

2025年度の実績は一定の成果を得られたものの「県民会議が目指すべき姿」が具体的にアウトプットできていないのが実情。

そこで、各運営委員が各々、2025年度の実績の棚卸しを行い、「まだ実現できていない部分も含め、今後どのような活動体であるべきか」を考え、言語化・可視化することで、それぞれが考える県民会議のあり方を本レポートでまとめた。

令和8年(2026年)3月作成



ABOUT

私のアクション！ 未来のNAGANO 創造県民会議とは？

人口減少という長期的な課題に対して、行政だけではなく、県民自身が考え、行動するための場として2024年度より活動がスタート。県内10地域とともに地域の未来を語らう機会をつくる「キャラバン」や寛容性について考える講演会や人口減少の事実や課題を学ぶための勉強会など、地域や業界を超えた活動を多数行ってきた。

設立の背景

人口減少が進む一方で、日常の中ではそうした影響や変化が見えにくく、危機感が共有されにくい状況だ。そのため、従来の行政主導の個別施策だけでは、社会全体の変化に対応することが難しくなっている。

そうしたことから、多くの県民は日々の暮らしの中で不安や違和感を抱えていても、「声を上げても届かない」「どうせ変わらない」と感じ、行政との距離を感じてしまいがちだ。「私のアクション!未来のNAGANO 創造県民会議」は、こうした見えにくい危機感や小さな不安を共有し、行動につなげ、未来の長野県を県民一人ひとりの手でつくりだすために生まれた。



1 不安や危機感を共有する 機会を生み出す

人口減少という「見えにくい危機」を可視化し、身近な不安や違和感を社会の課題として話せる場をつくる。また、話したことが現実に影響を与え、変化を生み出せることを実感できるための入口をつくる。

2 多様な価値観を受け止める 土壌をつくる

家族のあり方やライフスタイルなど、立場や属性を超えて安心して対話できる環境をつくる。こうした環境を通じて誰しもが主体となれることを示す。

3 とともに考え、 動く仲間をつくる

自らが課題を引き受け、考え、提案し、行動する仲間を作っていく。正解のない問いに行動を通して共に悩み、新しい「ありたい姿」を模索するプロセスを通じて住民自治の貫徹を実現する。

数字で見る 2025年の取組と成果

県民会議の会員数

309人

(91団体+218名)

アクション数(イベント参加人数)

1,284人

キャラバンで回った回数

10回

note 記事

34記事



各運営委員へのインタビュー

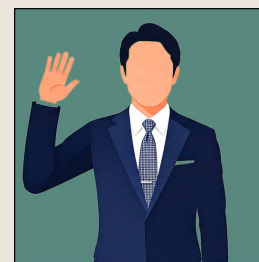
SUMMARY

インタビューサマリー

プロジェクトに関わる運営委員に対し、県民会議に関するインタビューを行った。2025年度の実践を行ったうえで、当初、自身で描いていた理想の姿にどれくらい近づけているのか、またすでに活動を行っている事業者やプレイヤー*とどのような連携を取りうるのか、2025年度に活動を行ったからこそわかる県民会議の立ち位置を整理した他、率直に課題として感じていることを洗い出した。なお、本サマリーは全インタビューをサマライズしたものではなく、主要な意見を抜粋したものとしている。

*プレイヤー

プレイヤーとは地域でなにかしらの活動を主体となって行う事業者、NPO組織、お店、コミュニティ、クリエイターなどを指す。



INTERVIEW 1

若年層向け施設の 運営者

若年層の居場所づくりに取り組み、地域と若者の接点を増やしてきた実践者。行政と民間、両方の立場を行き来しながら、挑戦の機会をどう地域に増やせるかの話を聞いた。

若者の挑戦を阻んでいるのは、本人の意欲の問題ではない。「やってみたいけど、やれない」状態を生む社会や環境の側にあると考えている。

県民会議については、コンセプト自体は評価しつつも、支援の手札や使い方が見えにくく、一部の動ける人だけが恩恵を受けやすい構造への懸念を伝えてくれた。一方で、自身の経験より行政の信用や接続力は大きな価値があり、それをどう使える形で開くかが鍵だと捉えている。

やってみたいけど、やれない。そんな社会になってしまっている。

社会との接点が少ないので、接点づくりをしているんです。高校生って、やってみたいけど、やれない。社会が阻害しているんですよね。すぐにSNSでさばかれて、肩身が狭くなる。だから、挑戦する機会をつくるのが大事で、そのためには大人と接することが必要なんです。実社会には「いいじゃん、やろうよ」って言える大人がちゃんといるので。

コンセプトはいい。でも、支援の方法がまだ見えない。

コンセプトと内容はとてもいいと思っています。でも、民間団体が何人かでやっても、エネルギーが散り散りになることがあるし、支援の方法がふわふわしている感じがある。主体が県民であることは大事なんですけど、だからこそ行政がどう関わるか、どうヘルプを出せるかの手札が見えないと、うまく機能しない人がいると思います。

認知されるだけでは足りない。実働までつながらないと意味がない。

認知度を上げるだけだと、たぶん足りないんですよね。1. 認知度をあげて、2. 関わりをつくって、3. 実働につなげる、そこまで必要だと思っています。若い人はわーって情報を発信するだけだとたぶん難しい。口頭で「こんなのあるよ」って言われる方が刺さる。年代によって届き方も違うので、認知のあとにどう関わってもらうかを設計しないと、使い方がわからないまま終わる気がします。

INTERVIEW 2

行政と民間の 間に立つ有識者

大学で研究を行い、教鞭を取る傍ら行政と民間のあいだに立ちその役割や成果の出し方を見つめてきた立場から話を聞いた。制度としての県民会議と、長野という土地の文化性の双方をいかに発揮するかを考えている。

県民会議に必要なのは、行政だけでは解決できない課題に対して、行政以外の人たちが関わり、「自分が関わることで実現した」と思える実感を生むこと。県民に伝わる説明や、声がどう反映されたかの可視化が追いついていない構造が県民会議の課題だと感じている一方で、挑戦的な旗を掲げたことは評価。長野の文化や外部の力も含めて、県民会議を「長野でチャレンジするためのキー」として育てていける可能性に期待。

説明できるものがまだない。そこをつくらないと伝わらない。

県民会議ってどういう取組なんですか、と聞かれたときに、そういう説明ができるものはまだ一つも用意できていないんですよね。行政だけでは解決できないことも、行政以外の人が集まることで解決できることをしたい。でも、県民会議が出したたくさんのキーワードは県民には伝わっていないし、自分たちの声がどう反映されているのか、そのつながりを初期でできるとよかったなと思っています。

「自分が関わってできたものだ」と、わかることが大事。

3,000人とのダイアログ*で、県政と県民の声がつながったことがもっと可視化されるとよかった。何人が参加したかも大事なんですけど、どんな話が出てきたかが重要。県民会議を知ってもらうだけでは足りなくて、知った結果、意識が変わるかどうかまでいかないといけない。サクセスストーリーで二匹目のどじょうを狙う、みたいなことも必要だと思っています。

* 3,000人とのダイアログ
県民会議立ち上げ時に、県民の声をもとにコンセプトを決めるべく長野に住まう若者男女3,000人と対話が行われた。

長野のことを身体性を持って語れるかどうか。

長野のことを身体性を持って語れるか、というのはすごく大事だと思っています。「心の中の長野」があるかどうか。長野県民はコンサバだし、本質的には排他的なところもある。でも、暮らしと自然とあそびが切り分けられていない、この地場の感じはすごくいい。だからこそ、県民会議も長野で事業やチャレンジをするためのキーになりうると思っていて、大学などで県外に出る前から、若者も使える場所だと知っていてほしいんです。

INTERVIEW 3

自然保育・ 地域活動の実践者

地域に根ざした保育・教育の実践を長年続けられてきた実践者。暮らし、自然、地域活動が切り分けられずにつながっている状態を大切にしてきた立場から、県民会議の理想のあり方について話を聞いた。現場の実践知と長野の地域性に、県民会議の運営方法を重ねて捉えている。

地域で動いている人に必要なのは、立派な計画や評価制度ではなく、「まずやってみる」ことを支える実践のリズム。

報告や振り返りが遅く、熱が冷めた後に整理されがちなことが課題だと話す。

長野の広さや地域差は弱みではなく強みであり、それぞれの地域に合ったやり方を模索し続ける場として県民会議には大きな可能性があるかと捉えている。

考えるより、まずやる。その場で反応を見る。

よく言っているのは「頭を使うだけではなく、すぐ動き出す」よく考えているうちに、考えが変わるんですよ。その場でやれば、良し悪しがすぐ出る。だから「すぐやる」が大事なんです。力まずに、みんながやればいいんですよ。実際にやってみると、子どもだってその場ですごく良いことを言ってくれるし、家に帰って実践しようってなる。

やったことの報告が遅いと、熱も学びも残らない。

県民会議は頑張っている。でも、やったことの報告が少ないんです。どんな結果があったのか、受け止めがあったのか、振り返りがされていない。鉄は熱いうちに打て、ですよ。1、2年も経ってから振り返りをしても意味がない。目の前でやってしまう、その場で話し合う、その積み上げが必要なんです。

長野の広さは困りごとではなく、やり方を増やせるポテンシャル。

長野県は広いし、地域ごとに特徴がある。だから、どこに手を入れて、地域ごとにあったやり方をどう模索するかなんです。広さは困りごとではなく、有利さでもある。県民の方々は、自分たちの地域の特徴に気がついていないこともあるけど、それをどうバネにするか。わかる必要がなくても、実践している人は実践している。そのことを応援していくのが大事だと思います。

INTERVIEW 4

県行政の実務者

県内各地を実際に見て回りながら、県民会議が行政の施策と地域の実践をどうつなげられるかを考えてきた立場から話を聞いた。県庁の内部から見た限界と、行政ではない県民会議が持ちうる価値を率直に語ってくれた。

県民会議に必要なのは、行政が主導することではなく、地域で動いている人たちの実践を起点に動きを起こしていくことだ。

成果が見えなければ活動は続けていけず、県外にも活動の意義が届きにくいと感じている。

県民会議は行政だけではつukれない対話の相手や実践の足場を生み出せるものであり、県民とともに成果をかたちにしていける点に可能性があると話す。

行政の関わり方と逆、矢印の向きが大事なんです。

県庁が旗を振って、音頭を取ると、結局県がやる「官製のもの」にしかならないと思うんです。そうじゃなくて、やりたいこと・動きが県民会議の中から出てくることが大事。プレイヤーの取組を主軸にして、県民会議に関わりたい人が集まる。行政が案を出し意見を貰うという、今までの審議会などのやり方とは矢印の向きが逆なんですよ。やりたいことをやってもらう、その矢印の向きが大事なんです。

長野県は一つじゃない。そこを前提にしないと伝わらない。

長野県の強みは多様性だと思っています。逆に言えば弱みでもあって、10の地域を見ても、エリアエリアで状況が全然違う。例えば、県がメッセージを出すにしても、同じ表現、同じ伝え方では伝わらないんです。だから、地域の違いに目を向けることが県民会議には必要だと思っています。コモンセンスをつくることを目指さない。つくらない方がうまくいくこともある。

認知されるだけでは足りない。誰が見ても評価できる成果が必要。

県民会議が活動を続けていくためには、やっぱり成果が必要だと思っています。やってよかったな、で終わりではなくて、誰が見ても評価できるものがほしい。たとえば若者の居場所の数とか、移住者が地域に入りやすくなる具体例な取組とか。「変わったね」という部分が顕在化すること。それが広めていくためには必要だと思うんです。

各運営委員が感じている 課題の整理

PROBLEM 1

「県民会議ってなに？」が一言で伝わらない

最大の課題は、県民から見たときに「なんのための場で、参加するとなにが起きるのか」が短く説明できないこと。事務局側も「様々な主体と共創する観点から、抽象度が高い概念になっている」という認識があり、理念という核は共有できているものの、具体的になにができるのかという輪郭がぼやけてしまう可能性がある。

「県民会議」を知った多くの人は「素敵なことを言ってるな」という共感にはたどり着いている。しかし、“参加のための判断材料”が持てない状況にある。

県民会議の説明資料が「網羅的」であることも、輪郭を曖昧なものにする要因となっているのではないだろうか。必要なのは、概念的な正しさを伝えるだけでなく「入口で迷わない設計」と「参加後の最初のステップづくり」である。

PROBLEM 2

成果が見えにくく、アクションした実感が積み上がらない

県内各地域での熱の高まりは、キャラバンによる対話などを通じて徐々に可視化されてきている。しかし、「なにが起き、なにが変わったのか」という出来事や、エピソードがタイムリーに発信されず、学習と横展開が起きにくい状況にある。「やったことの報告が伝わりにくい」という指摘は、現場の努力が「共有されず消えていく」構造を示している。構造と同時に、事務局のみが発信を担う体制も、シンプルにマンパワー不足につながる大きな課題だろう。

発信が遅れると、臨場感が薄れ、関係者の納得感も熱とともに弱まっていく。

現在の公式noteによる発信だけでモチベーションを維持するのはどんな立場に関わっていても難しい。短いサイクルで「途中経過の変化」を共有する必要がある。成果（結果）だけではなく、途中の判断・工夫・失敗を含めて積み上げることで、次の実践へとつなげていきたい。

PROBLEM 3

行政の“手札”が見えにくい

県民主体で動くとしても、行政の使い方が重要になってくる。行政との付き合い方に慣れた人だけがショートカットを得て前進し、「仲間は集まったが、動き方が分からない層」や、「なにかしたい想いはある仲間探し層」が取り残されているように感じる。これは設計の問題であり、支援メニューと接続手順をパターン化することで解決はできるはずだ。

どのようにして、再現可能な仕組みを整えるのか。行政をうまく使う「勝ちパターン」を模索したい。

PROBLEM 4

県域の広さが、参加と実装のハードルになる

インタビュー時には「県境の市町村から、長野市に来るだけでも4.5時間かかる」という発言があった。長野県は県域が広く、移動の負荷そのものが参加への障壁になる。

加えて、長野県は地域ごとに風土も文化も違うことが最大の特徴であり、直面する課題やアプローチの仕方に差が生まれ、全県一律で同じ形式をあてはめてしまうと取組が破綻しやすい。参加者が地理的に偏ってしまえば、県民会議が“特定エリアの取組”に見えるリスクも高まる。

重要なのは「地理的なフレキシブル性・情報流通の円滑性」を県民会議の土台ととらえ、分散型の運用を構築すること。物理的な負担と情報格差を解消することで、実装への一步を後押しすることが可能となる。

PROBLEM 5

認知→参加→アクション の導線が未整備で、 熱い人が先に離脱する

認知が広がっても、参加後に「なにをすればいいか」が見えないとその後のアクションにつながらない。インタビュー時には「参加とアクション、その後の成果の共有までのつながりを初期でできるとよかった」という発言があった。

初期設計で、「自分たちが動くことで、レスポンスが返ってくる」という流れを作れなかったことは今後時間をかけて響く課題となるかもしれない。なぜなら、早期参加者は熱量が高い傾向にあり、「自分向けの場でない」と感じたら見切りは早い。そのため、「次の一步」を提示し、短期の成功体験を生み出すサイクルを定着させることを考えたい。



県民会議のあり方に関する試案



県民会議は、“長野県に生きる意味”を、 ともに育むための活動

「この場所でずっと暮らしていきたい！」

そんなふうに思えるのは、自分自身が「今、その場所で生きる意味」を感じられた瞬間ではないでしょうか。正直なことを言えば、東京やニューヨークのような大都市でも、人口100人の小さな島でも、どんな場所でも生きる意味は見つかります。もしかしたらそれは、誰かと顔が見える関係性になったとき。何かをつくってリアクションを受け取ったとき。なぜなら「生きる意味」とは、あなたが地域や社会と関係性を育む中ではじめて感じられるものだからです。

オール信州で人口減少に伴う様々な課題を乗り越え、よりよい未来を創造していくためにつくられた県民会議。県民会議は「信州・長野県」に

関わりをもった一人ひとりが、「長野県で生きる意味」と出会い、ともに育むための活動とも言えます。それを若者や女性、これまで大きな声をあげられなかったすべての人たちと行うことを目指します。今よりもっと多様で多くの人と「長野県で生きる意味」を育めたとき、はじめて「信州未来共創戦略」で掲げた寛容な社会が実現するのではないかと思うからです。

確かに、少子高齢化、インフラの老朽化、後継者不足など人口減少による課題は山積みかもしれません。「そんな場所では生きられないよ」、ときにはそんな声も聞こえてきそうです。でも、長野県には標高3,000m級の山々が連なる日本アルプスや、佐久・伊那・松本・長野などの盆地が

育んだ豊かな風土があります。こうした自然環境はどこにでもあるものではなく、つくろうにも人間の力の及ぶものではありません。だからこそ、この場所で育まれた歴史や文化は多様で、おもしろいのです。

「便利さを考えれば他の場所でもよかったけど、長野県で生きる意味を見つけられた」、そんなときに自然と口に出る「こんな地域に暮らしたい」という想い。それが結果として長野県を前に進めていく力になるはずです。そのために県民会議は4つの役割で「人與人」「人と地域」が関わりを深めるための活動を支援することを目指します。

KEYWORD

言葉の説明

言葉の説明1

「生きる意味」についての試案

「生きる意味」とは、社会の中で主体性をもってアクションできること、そしてそのアクションが受け止められ、自らの居場所ができることを意味すると思います。

「生きる意味」と聞くと、SDGsのような大きな社会課題に取り組むことや、起業してビジネスで成功するようなことを思い浮かべる人もいるかもしれませんが、反対に、「私は家のことを守るのが役割だから」と、今ある一つの役割で自分をイメージする人もいるでしょう。どれも素敵なことです。でも、今一度、そうしたものと違うかたちで「生きる意味」への考えをスタートさせてみたいのです。

たとえば、町内の子ども食堂に手伝いに行ってみること。地域のイベントで受付や写真係を引き受けてみることに。大事なことは、そうしたアクションが誰かに届いて、「助かった」「面白かった」「次も一緒にやろう」とリアクションが返ってくること。そうした応答の中で、「自分がここにいる理由」や「生きていく手触り」が少しずつ育つと 생각합니다。

言葉の説明2

「寛容性」についての試案

寛容性には色々なとらえ方があるかもしれませんが、「多様な主体者が活動し、存在や価値を認められている」ことは重要なファクターと考えます。「何をやってもいいという無法状態」は「寛容性」ではありません。意見や立場が違ってもお互いを否定するのではなく、共に前を向いて進んでいくこと、県民会議の活動を進めていく上ではこのことが重要ではないでしょうか。誰もが参加者ではなく、主体者として声を出し、行動を起こしていける状態を目指します。

また、若者や女性、これまで声が小さくなりがちだった人たちも、自分の言葉で関わるができる環境づくりを目指します。失敗しても否定されない。経験の浅さで置いていかれない。声の大きさだけでは決まらない。一部のがんばる人を見つけ支援するだけでなく、「どれくらい多様な主体者を生み出したのか」を寛容性のバロメーターにしてはどうでしょうか。

「県民会議」が担うべき 4つの役割

FUNCTION 1

日常の小さな不安や、 なにかしたいという想いを 「最初の一步へ」変えること

**県民一人ひとりが熱量を持って取り組める
テーマや課題を可視化し、発見する機会づくり**

「なんだかずっと、少しだけ将来が不安」「なにかはしたいんだけど……」
そんな状態でも参加できるのが県民会議です。いま気になっていること、
身の回りの違和感、好きなことや得意なこと、そうしたことを言葉にして「な
ににチャレンジしてみたいのか」に気づくための時間がここにあります。言
葉にするのが苦手でも大丈夫です。新しい気づきを得るためのいろい
ろな人との出会いや対話、そして地域や社会に関するさまざまなデータがヒ
ントをくれるはずです。

なんとなくの方向性が見えてきたら、まずは一度試すことができそうな小
さなアクションと一緒に計画してみましょう。そのために必要な協力者、場
所、期間を整理して今日から動ける形にしていきます。県民会議は一人ひ
とりの想いを、具体的なアクションに変換するための場所です。

DREAM EPISODE 1

ある高校生が自分の 「気になる」を、 地域の活動に 変えるまで



「こんな素敵なことを起こしたい」という架空のエピソード

県内のある高校生は、放課後に駅前や公園で過ごす同世代を見ながら、「もっと気軽に集まれて、やりたいことを話せる場所があればいいのに」と感じていた。でも、その想いを誰かに話したことはなかった。自分に何ができるのかもわからないし、そんなことを言っても大人には相手にされないだろうと思っていたからだ。

そんなとき、県民会議を知った。「まだ形になっていなくてもいいから、気になっていることを話してみよう」と声をかけられて足を運んでみようと思った。最初はいま言葉にできなかったが、県民会議の参加者と対話を重ねるうちに、「自分は自分と同じ世代、若い人が生き生きとできる場をつくりたいんだ」と整理でき、「それって、すごくいいね!」という言葉に勇気が出た。「まずやってみることだよ、私はこんなイベントをやっていて…」とアドバイスをくれる人もいた。そこで、いきなり大きな企

画にするのではなく、まずは地域のイベントの一角を借りて、高校生同士が自由に話せる小さなコーナーを一日だけつくってみることになった。

実際にやってみると、同世代の数人が立ち寄り、「こういう場、ほしかった」「またやってほしい」と言ってくれた。その言葉は大きな手応えになった。自分の違和感や願いが、ただの思いつきではなく、誰かの必要にもつながっていると初めて実感できたからだ。

県民会議が果たした役割は、大きな夢を語らせることではない。まだ輪郭のない想いを、言葉にし、最初の一步のサイズまで小さくし、「やってみてもいいよ」と背中を押してあげることだった。

そのときに生まれた小さな実践が、その後の地域活動や次の企画につながっていくのである。

FUNCTION 2

一人がはじめた挑戦を、 「チームでの目標」へ成長させること

**志やテーマを共有できる仲間や、
必要なスキルを持った人材との出会いをつくる**

「やりたいことはあるのに、苦手なことがあってそれ以上前に進めない」
そんな人同士が会うための場所が県民会議です。「あなたの考えている
こと、やっていることはおもしろいね!」と、地域や年齢を超えて、関心や熱
量の近い仲間とつながる機会がここにあります。異なる立場や違った経験
を持つ人と話すだけで、自分一人では思いつかなかったことが見えてきま
す。

仲間が見つかったら、次は「誰が・何を・いつやるか」を考えるステップで
す。旗振り役だけが頑張るのではなく、関わる一人ひとりが主体的になれ
る方法を模索します。県民会議は一人の想いをチームの目標に変えていく
ための場所です。

DREAM EPISODE 2

ある子育て世代の 想いが、 地域の仲間とともに 続く活動になるまで



「こんな素敵なことを起こしたい」という架空のエピソード

県内のある子育て世代の女性は、子どもを連れて地域のイベントに参加するたびに、「子どもが楽しめる場はあっても、親同士が本音で話せる場は少ない」と感じていた。家事や育児、仕事のことを誰かと気軽に話したいと思っても、地域には相談の場はあっても、一緒に考える場はなかなかなかった。何かやれたらと思いつつも、一人で始める自信はない。

県民会議に誘われ、その想いを話してみると、同じような違和感を持つ人が何人もいた。子育て中の人だけでなく、地域で活動をしている人、福祉に関心のある人、教育に関わってきた人など、立場の違う人たちが少しずつ集まった。話していくうちに、「親のための相談会」ではなく、「親も子ども気軽に来られて、雑談から関係が始まる場」をやってみようという方向性が見えてきた。

役割を分けることで、負担も一人に集中しなかった。会場探しをする人、広報をする人、当日の見守りを担当する人、記録をとる人。それぞれが得意なことを生かしたことで、最初の一回は「誰かの企画」ではなく「みんなの試み」になった。当日、参加者から「また来たい」「今度は自分も手伝えたい」と声上がり、場は一度きりで終わらず、次回へとつながっていった。

県民会議が担ったのは、ただ人を集めることではない。一人の想いを、継続のためのチームへとかたちを変えることだった。誰しも、ひとりで頑張ることには限界がある。同時に、活動を主体でしている人が多くの関わりを求めることが難しいこともある。そんなときに少しずつ周囲の人に役割を与え、次の人が関わりやすくする余白をつくっていくものも必要なのだ。

FUNCTION 3

動き出した人やチームがぶつかる 「壁を乗り越えるツール」をつくること

**「やりたい」を応援し、情熱のある人が
活動を継続できる環境を整える**

「活動をもっと発信したい」「持続的に活動できるような仕組みを考えたい」
そんな壁にぶつかったときに、伴走するのが県民会議です。動き出した人やチームはいつだって「人や情報」のリソースが足りず、壁にぶつかるもの。県や地域の制度、相談先、協力の得方など、使える支援の情報をアドバイスし、必要に応じて適切な専門家や窓口にもつなげます。
また「何を、誰に、どう伝えると進みやすいか」を一緒に考えれば、回り道も減らせます。
小さな取組が止まらずに育っていくように、現場の摩擦を減らしていく。県民会議は挑戦を実装へ近づけるためのツールを用意する場所です。

DREAM EPISODE 3

ある地域活動が、 「いい取組」で 終わらずに育つまで



「こんな素敵なことを起こしたい」という架空のエピソード

県内のある地域で、小さな交流イベントを始めたグループがいた。最初の開催は手応えがあり、参加者からも好評だったが、二回目以降を考えたときに壁にぶつかった。広報をどうするのか、会場費はどうするのか、誰に相談すればよいのか。手弁当ではじめたイベント。熱意はあっても、仕組みや手順が見えず、誰しもが責任を取ることを恐れ音頭を取る人も及び腰に。そうすると「これ以上続けるのは難しいかもしれない」という空気が流れ始めていた。

そのとき、関わっていた一人が県民会議を見つけ、自分たちが受けられる支援や相談先に関するアドバイスを受け、つながることができた。そこで彼らは「次に何をすればいいか」を具体的に描けるようにな

り、話がまた盛り上がるようになった。そして、活動の意義をどう伝えれば共感を得られるかそんな議論も盛り上がるように。結果として、その活動は二回目、三回目へと続き、協力者がもっと増えていった。もし最初の熱意だけで進めていたら、単発の「いい取組」で終わっていたかもしれない。でも、取組の途中で必要な支援につながれたことで、活動は地域に根づく可能性を持ち始めた。

県民会議がここで果たした役割は、動き出した人が、次の壁で止まらないように、裏側から支えることだ。活動が地域に根づくためには継続していく仕組みが必要だ。こうして大小の活動が継続していくことで、地域に挑戦という風土が育っていく。

FUNCTION 4

県内外の枠を超えて 「知恵や技術、アイデアを持った人」 同士をつなげること

活動の価値をより高めるための チャンネルづくり

活動をしていると、時には、県内だけの取組に留まらないことがあるかもしれません。その時に、県内の活動者と県外の活動者がつながるチャンネルのひとつに県民会議がなることができれば、活動の価値をより高めることができるかもしれません。

また、将来的には「アイデアや技術はあるのに試せる場所や機会がない」そんな想いを抱えている県外の挑戦者や企画のアイデアを、県内の実践者や地域につなげていくことも重要です。ここで目指すのは、県外の人をただ長野県に呼び込むことではありません。信州未来共創戦略で描いた未来に近づくために「今長野県にない」知恵や技術、そして情熱を持った県外の挑戦者が県民会議とかかわり刺激を生み出すことを大切にしたいのです。地域や組織が外部の実践者と出会う機会を提供するだけでなく、短期間でも実践を行っていくことまでを支えることで、地域にとって貴重な成功も失敗も含めた経験という財産をつくります。県民会議は長野県と外の地域をつなぐチャンネルです。

県外で生まれた アイデアが、 長野と出会って かたちになる



「こんな素敵なことを起こしたい」という架空のエピソード

ある県外の若手クリエイターは、高齢化が進む地域に向けた小さな移動支援サービスのアイデアを持っていた。技術も構想もあったが、実際に試せる現場がなく、どこで誰と組めばいいのか分からないまま、企画は宙吊りのままほったらかしに。地域課題に向き合いたい気持ちはあっても、東京を拠点にする彼には実際に取組を具体化するための入口がなかったのだ。

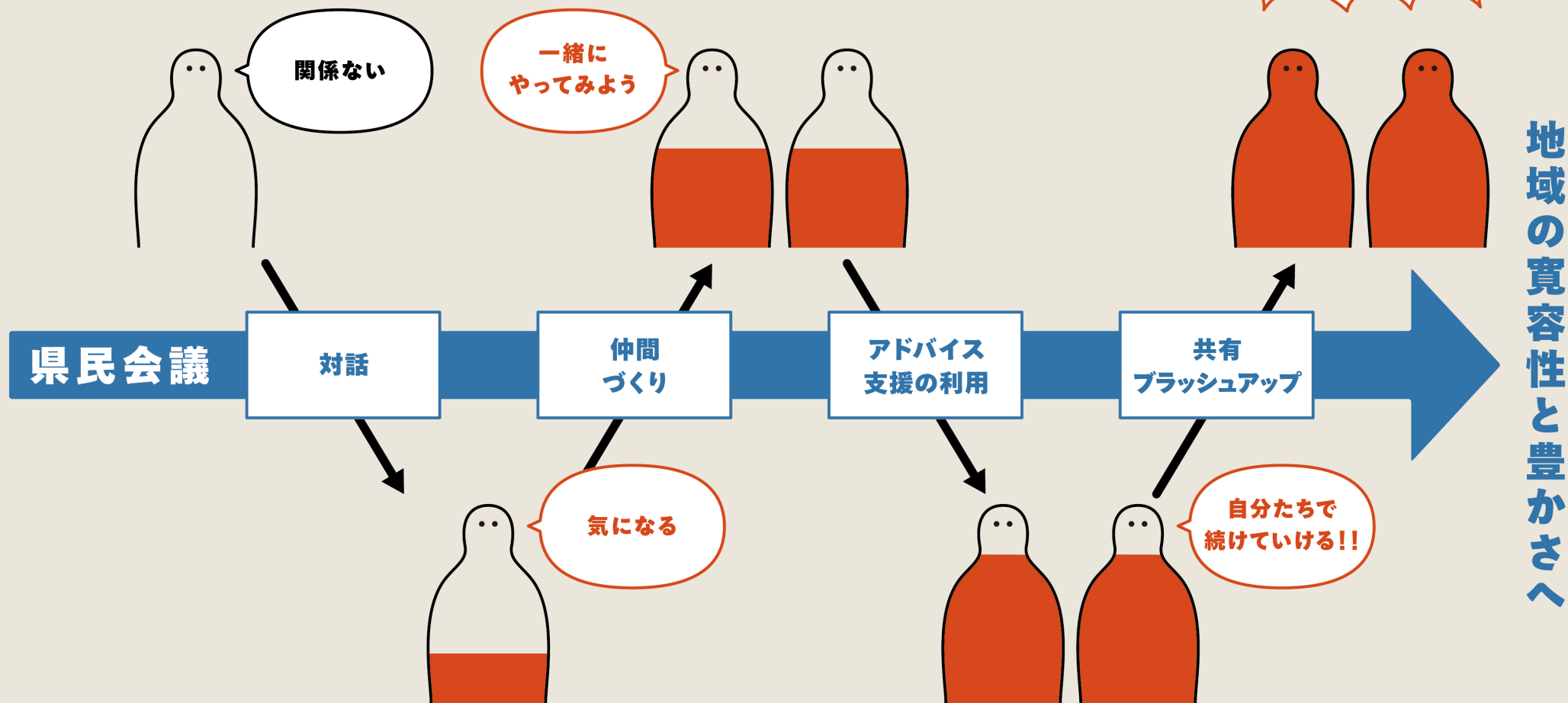
県民会議を通じて、そのクリエイターは長野県のある建設業の社長と出会った。話をしてみると、社長も地域への想いを人一倍持っていて、地域への入口をつくった。ただ、話を重ねると当初のアイデアはそのままでは使えないことも分かった。移動の支援だけでなく、地域の見守りや買い物支援ともつながる形の方がいいのではな

いか。対象も、高齢者一般ではなく、特定の地域の暮らし方に即した設計が必要ではないか。

その後、短期間の実証が行われ、実際に使ってみた住民や関係者から、課題も手応えも返ってきた。うまくいったことだけでなく、うまくいかなかったことも共有されたことで、その取組は単なる外部からの提案ではなく、長野県に根ざした学びへと変わっていく。

県民会議が担ったのは、県外の人をただ呼び込むことではなく、県外のアイデアや人を長野県の地域性にあわせてマッチングさせていくこと。それは、多様で、地域への熱い想いを持つ会員からなる県民会議だからできることである。

「参加者」 → 「主体者」
県民会議





今後の活動に向けて

POINT 1

対話をし続けるための、 習慣と循環づくり

一人ひとりが新しい一歩を踏み出し続けられる環境をつくるために必要なのは「一度話して満足するイベント」の設計ではなく、対話を続ける姿勢や態度を習慣として地域に根付かせること。

県民会議が正解を出すことを目的にした場ではないからこそ、違う意見を持った人が一緒に時間を過ごし、自分のことを語り、問いを持ち帰り、また集うことのできる循環が大切です。「安心をして対話ができる」「また話したい」と思える環境こそが自然とコミュニティと呼ばれるものになるはずです。今後はそうした「対話をし続ける」ためのと習慣と循環の仕組みづくりを大切にします。

POINT 2

若い世代や女性が もっと輪の中心へ

地域の空気は「誰が主役になれるか」で左右されがちです。若者や女性が「伝えられるターゲット」として語られるだけでなく、主体となって言葉を発する場や機会が必要です。

多様な主体が自分の言葉で関わり、試し、意思決定に入れる状態。「私なんて」と感じてきてしまった人々に、少しずつ責任の主体を渡せるような環境づくりを大切にします。

POINT 3

やってみる姿勢を、 オンラインと オフラインで見せる

立派な宣言や言葉より、県民会議では「踏み出した一步」「やってみた事実」を大切にしたい。そのためにはまず、県民会議にかかわる運営委員やスタッフ、先を走る実践者が「やる姿勢」を見せることが必要です。

やったことがなくても試して、失敗して、学んで修正する。壁にぶつかっても起き上がり、再度挑戦する。そんな姿勢そのものが新しいチャレンジャーを生み出すなによりのエネルギーになるはずです。

だからこそオフラインでは試す場をつくり、「やってみる」が見せられたかにこだわる。オンラインでは「試したこと」をテキストや写真で積み重ねる。試行錯誤を見せ、参加のハードルを下げ、「最初の一步が県民会議だった」というエピソードをつくることを目指します。

POINT 4

長野県に眠る 資源を掘り起こし、 使えるかたちへ

県民会議では「新しく生み出すこと」だけでなく、「すでにあるものを活用する」ことも大切にしたい。長野県には豊かな自然にはじまり、空き家・空き店舗・未活用の公共空間、休眠している人材や関係性など、眠っている資源がまだまだ多いのではないのでしょうか。

それらを掘り起こしていくことは、「誰かのアイデアを生み出し」そして「そういった資源があるのなら」と誰かの背中を押すことにつながるはずです。